



## 第46回「おかねの作文」コンクール

# 銀色のペットボトル

鹿児島県・ラ・サール中学校 2年 大山 農

僕が1円玉を集め始めて4年がたつ。4年間、親や兄弟、友達などに協力してもらい、1円玉を両替し続けた。その結果、今1円玉は6,000枚もたまった。

4年前、ある大型スーパーに家族で出かけた時に、『1円銀行』という商品を見つけた。『1円銀行』とは、ペットボトルのふたに取り付けることができる貯金箱で、1円玉をいれていく度にその枚数がカウントされ、ペットボトルに1円玉が貯まるとい商品だ。

僕はその商品に興味がわき、商品を手にし、眺めていると、「いいな、それ。」

と父に言われた。僕は、意味が分からず、首をかしげて黙っていると、「いいよ、買ってやる。」

と言われた。いきなり言われたので話についていけず、ありがとう、ととりあえず言っておいた。これをきっかけに、僕は1円玉を集め始めた。

初めは、せっかく買ってもらったのだからという気持ちで、遊び半分で集めていた。でも、最近になって、いろいろなことに気付いた。

まず一つめは、お金の大切さだ。片手では持ち運びできないくらい重い6,000枚の1円玉と、風に飛ばされてしまうくらい軽い1,000円札と5,000円札は、同じ価値だと思うと、慎重にお金を使うようになった。

二つめは、1円の大切さだ。

「1円を笑う者は1円に泣く」ということわざがある。「1円をおろそかにする者は、その1円を得られずに泣くような目にあう」ということ。わずかのお金でも大切にすべきだという教え」だ。

僕は、このことわざに深い共感を覚えた。なぜなら、僕は何年か前にこのような経験をしているからだ。

ある日、親から買い物を頼まれたため、渡されたお金をポケットに入れ、近く





のスーパーに行った。無事に買わなければならなかったものはすべて見つかったのだが、手持ちの金額と商品の合計金額を比べてみると、たった1円だけ手持ちのお金の金額が足りなかったのだ。

商品は1円でもお金が足りなかったら買えない。その時の足りない1円は、欲しい商品の価値と同じだと思う。そう考えると、1円はとても大切だなあと考える。

三つめは、『1円銀行』を買った時の父の気持ちだ。物を買ってもらう時、僕が相談する相手は母だ。でも、『1円銀行』を買うと決めたのは父だ。その理由が分かってきたような気がする。

父は、僕にお金を使うということの重大さについて教えようとしていたのだと思う。

それに、買ってもらった時の僕はお小遣いをもらっていたが、欲しいものが見つかったらあまり考えずに買っていたので、ほとんど貯金をしていなかった。1円玉を貯めさせることで、貯金の大切さを気付かせたかったのだと思う。

でも、持っているお金すべてを貯めるべきではないと思う。日本中でたくさんのお金が回り、それによって経済が成り立っているのだから、みんながお金を出し惜しみするのは良くないと思う。

景気が良くなる兆しが見えつつある今、僕はとても大事な時期だと思う。日本国民全員がお金を貯めこんでいると、良くなりそうな景気も悪くなってしまう。だから、お金はすべて貯めるのではなく、必要なものか必要ではないものかどうか見極めて適度に使うべきだ。

僕は、この銀色のペットボトルからたくさんのことを学んだ。そして、銀色のペットボトルが増える度、僕のお金に関する興味や知識、理解は深まっていく。そう考えると、1円玉を集め続けようと改めて決心することができた。お金について学び続けるためにも僕は銀色のペットボトルを作り続ける。

